

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：32605

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16631

研究課題名(和文) プラトンとアリストテレスの文芸論とその現代的意義の研究

研究課題名(英文) The Literary Theories of Plato and Aristotle: Its Significance for Modern Aesthetics

研究代表者

田中 一孝 (Tanaka, Ikko)

桜美林大学・人文学系・講師

研究者番号：50705192

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的はプラトンやアリストテレスをはじめとした古代ギリシアにおける文芸論の現代的意義を提示することである。そこで本研究ではまず古代ギリシア文芸論の基礎的概念である「模倣(ミーメーシス)」に着目し、その概念の歴史の変容の過程と哲学史において果たす重要性を明らかにした。以上の研究を基盤として、(1)ミーメーシス概念と現代の表象概念、また創作を鑑賞する際に現代の我々が持つ(2)「フィクションである/ない」と古代の「真実/虚偽」という思考を比較検討し、現代とは異なった芸術鑑賞の態度を提示するに至った。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research was to present the significance of ancient literary theories, especially of Plato and Aristotle, for modern Aesthetics. First, I focused on investigating a basic concept of ancient literary criticism, that is, "mimesis," and I studied the historical development of the concept and its significance for the history of philosophy. Next, I focused on the modern concept of "representation" and its difference from mimesis. Third, I compared the modern aesthetic judgement about "whether it is fiction or not" with the ancient criterion about "whether it is alethes or pseudes."

研究分野：西洋古代哲学史

キーワード：プラトン アリストテレス ミーメーシス 模倣 詩 芸術

1. 研究開始当初の背景

現代の我々は映画、小説、劇、写真などの芸術や、テレビ番組、あるいはメディアによって伝えられる情報を受け取る際、それがフィクションであるかどうかという点を重視する。なぜならそれによって受け取る情報の意味や、それに対する我々の態度が大きく変わるからである。

他方、古代ギリシアにはフィクション概念はおろか、そもそも「芸術」概念すらも存在しなかった。そうした状況下で、古代ギリシアの人々は文芸や絵画など、我々が「芸術」と見なすものについての理解、そしてそれに対する態度が全く異なっている可能性がある。

本研究の背景には現代の我々が自明としているような芸術鑑賞の態度、そしてそれによっては理解できないような古代ギリシアにおける「芸術的作品」の鑑賞態度の想定がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は「芸術」や「フィクション」などの基礎概念が存在しなかった古代ギリシアにおいて、人々が文芸の創作をどう理解し、どのように鑑賞していたのかを、とりわけプラトンとアリストテレスの文芸論に着目しながら、明らかにするものである。さらにそうして明らかになったことを、現代美学の理論と比較検討し、古代文芸論の現代的意義を提示することである。

3. 研究の方法

本研究はプラトン・アリストテレスのギリシア語原典の精読と現代美学の議論の検討とを視野に入れて行われた。

ギリシア語テキストを読む際には、羅英仏独の注釈・論文を調査し、解釈を施す伝統的な古典文献学的手法を用いた。対象となるテキストは、プラトンの『国家』篇、アリストテレスの『詩学』が中心となった。ただし、他にも詩作や詩に関わる重要概念の言及がなされるプラトン『イオン』『パイドロス』『ティマイオス』『法律』、アリストテレス『レトリカ』『政治学』なども適宜参照された。

他方、本研究はフィクションによって喚起される感情についての現代の議論を取り上げた。その際に参照されるのは、いわゆる Radford のパラドクス(C. Radford, 1975)に端を発したフィクションに喚起される感情の真正性を問う一連の議論である(B. Paskins, 1977; K. L. Walton, "Fearing Fiction," 1978, Mimesis as Make-Believe, 1990; P. Lamarque, "How Can We Fear and Pity Fictions?," 1981; J. Morreall, "Enjoying Negative Emotions in Fictions," 1985 など)。

4. 研究成果

(1) 模倣概念の再検討

古代ギリシアにおいては「芸術」概念は存在しなかったがそれに類似する概念として「模倣(ミーメシス)」と呼ばれる概念が、詩や絵画、音楽、ダンス、彫刻などの創作活動を記述する際に用いられていた。本研究では、プラトン以前からプラトン、アリストテレスにいたるまでの模倣概念の歴史的変遷を調査し、現代の「芸術」や「表象」などの概念と比較し、その違いを明らかにした。

(2) 模倣概念とコスモロジー

プラトン『ティマイオス』篇におけるミーメシス概念を論じ、その哲学的な意義を明らかにした。『ティマイオス』篇においては、デーミウールゴスという神的な職人が、永遠的なパラダイグマをもとにこの世界(コスモス)を整えて作ったと言われている。その際、コスモスはパラダイグマの模倣物(ミーメマ)であると描かれているため、これを典拠に解釈者たちは、デーミウールゴスが神的・哲学的な模倣家であること、さらにはプラトンが神的・哲学的な詩作の可能性を認めていると考えてきた。これに対して本論は、ミーメシス系タームの用例を詳細に検討することを通じて、こうした解釈は適切ではないことを明らかにした。他方で、文芸論や「芸術」論の枠組みで解釈された『ティマイオス』篇におけるミーメシス関連の用語は、プラトン以前とは異なった仕方で用いられており、しかもそれは哲学的に見ても重要であることを、ヒポクラテス派やピュタゴラス派の模倣概念と比較検討し論じた。

さらにプラトンが世界の事物がコスモスやイデアに類同化する動的振る舞いをしていく様子を、ミーメシス系の語によって描いたことによって、新プラトン主義のヒエラルキー的世界観を説明するための装置として受け継がれたこと明らかにした。

(3) 哲学的な模倣

本研究ではまた、プラトン『国家』篇第6巻における哲学者によるイデアの模倣とそこへの類同化がどのような事態であるかを明らかにした。

『国家』第6巻においてソクラテスは、真の哲学者は世間ごとにかかざらうことなく、「整然として恒常不変のあり方を保つものに目を向け、不正を犯し犯されず、すべて秩序と理を伴っていることを観照しつつ、それらのものを模倣して、可能な限り類同化する(500c3-6)」と述べる。このように恒常不変のイデアを模倣し、共に過ごすことを通じて、哲学者は人間に可能な限り秩序を保ち神的になるとされる(d1-2)。

「恒常不変なあるもの(アイデア)を模倣する」という表現はとても謎めいているが、Annas によれば哲学者によるアイデアの模倣は、哲学者のうちにある知性はその思考において、諸アイデアの秩序だっている関係を再現するというマイクロコスモス-マクロコスモス的な関係を示しているという。また別の解釈として、哲学者が知性によって宇宙の円環運動を真似るといことも考えられる(Cf. Sedley, Armstrong)。

本研究では上のような解釈を批判して以下のことを論じた。ここでの「模倣」や「類同化」という言葉は、哲学者が知性を宇宙の知性に似せる活動を説明するために、宇宙論を背景として用いられているのではない。むしろ恋愛論を背景としており(485c-e, 490a-b)、アイデアとの「交わり 500c7, d1, 611c5; cf. 403b7, 『饗宴』209c2」の中で魂が自然本性的に被る変化が説明されている。すなわち哲学者は、不正のない秩序立ったアイデアを観照し、交わることで真の徳を「産み出す(490b5, cf. 『饗宴』206-209)」。こうしてアイデアを模範としながら自らの魂を真に徳あるものとして「形作っていく(500d7)」ことが、ここで「模倣」と呼ばれている活動である。

(4)フィクションと真偽

我々は小説、劇、映画、テレビ番組を鑑賞する際にはそれが「フィクションあるか否か」を重要視し、それによって鑑賞の態度を変える。それに対してフィクション概念が存在しない古代ギリシアにおいては、描かれている対象が「真実/虚偽」であるかどうかを重要視していた。このときの真実は、善や正しさという倫理的な概念を包含しているため、創作対象の真偽を判定する際には、必然的に倫理的評価を含まざるをえない。詩劇を通じて教育を受け、市民性を涵養していた古代ギリシアの人々にとって、詩の鑑賞に倫理的な評価を巻き込むことは自然なことであり、公共性が詩の評価を左右することを明らかにした。

他方アリストテレスは、こうした背景のもと、技術ごとに真偽が異なることを指摘している。(1)これは倫理性を詩作の評価から引き離す議論である点で、(2)フィクション概念に頼ることなく、詩劇の他の分野からの自律化を促した点、言い換えれば詩の専門的な評価・批評の可能性を拓いた点で画期的であったことを指摘した。

(5)フィクションと感情

現代フィクション論においては、フィクションナルな非存在に、感情を動かされることは非合理的であると言われる。なぜなら、現実において、起こらなかった出来事に感情が動くことはないからである。他方、古代ギリシ

アにはこうした問題自体が生じえない。本研究ではこうした問題がなぜ古代ギリシアには存在しないのか、プラトンの認識論を参照しながら明らかにした。

古代ギリシアにおいてはフィクション概念自体が存在しないので、現象の真偽をフィクションに相当するか否かではなく、理知的な思考によって正当化できるかによって判断した。人間にはそうした理知的な思考をできる部分と、現象に引きずられ感情を表出させる部分が魂の中にある。言い換えれば自己を分割して理解することができたため、同一の対象に対して矛盾した思考を持つことができた。他方、現代フィクション論はむしろ対象世界をフィクションであるかないかによって分割し、そうした世界に対して一貫した態度を取れていないということに起因して、いわゆる「Radfordのパラドクス」というフィクションと感情のパラドクスが生じているのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

松井克文、田中一孝(2017)「風景の潜在能力」『環境芸術』18号, 90-97頁。(査読有)

Ikko Tanaka (2016) "Divine Immortality and Mortal Immortality in Plato's *Symposium*", *International Plato Studies 35: Plato in Symposium*, Academia Verlag, pp.309-314. (査読有)

〔学会発表〕(計 4 件)

田中一孝 (2017.9.17)「プラトン『国家』篇における哲学者の模倣」中畑正志先生還暦記念研究会, 京都大学。

Ikko Tanaka (2017.5.27) "Mimesis in Plato's *Timaeus*", the Third Interdisciplinary Symposium on the Heritage of Western Greece, Syracuse.

Ikko Tanaka (2016.7.26) "Plato on Poetry, Emotion and Its Significance for Modern Aesthetics" 20th International Congress of Aesthetics, Seoul.

田中一孝 (2016.3.26)「プラトンとミーメシス」古代ギリシアフォーラム第45回例会、大学コンソーシアム京都

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中一孝（Tanaka Ikko ）

桜美林大学・人文学系・講師

研究者番号：50705192

(2) 研究分担者

（ ）

研究者番号：

(3) 研究協力者

（ ）